慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 毛宗崗本『三国志演義』における魏の降将：関羽との関わりから見る張遼・徐晃・龐徳について |
| Sub Title | General who surrendered to Wei in Mao Zonggang's edition of Sanguo zhi yanyi : focused on Zhang Liao, Xu Huang, Pang De and their relationship with Guan Yu |
| Author | 鵜浦, 恵(Unoura, Megumi) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2021 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.120, (2021. 6) ,p.27 (214)- 47 (194) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01200001-0027 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 毛宗崗本『三国志演義』における魏の降将

## ――関羽との関わりから見る張遼・徐晃・龐徳について――

鵜浦　恵

### 一　はじめに

『三国志演義』において、曹操ほど人に惚れこみやすい人物はいないだろう。最もよく知られているのは、「関羽千里行」や、赤壁の戦いにおける華容道など、名場面の多い曹操と関羽とのエピソードだが、曹操は他にも許褚や徐晃、賈詡など多くの人材に惚れこんでは部下に引き入れ、活躍の場を与えている。そのため、同じ魏の降将といってもその出自は様々であり、それぞれの人間像も十把一絡げに論じられるものではなく、多様なものとなっているはずである。

さて、その『三国志演義』には様々な版本が存在するが、その中で通行本となっているのは清代初期に刊行された『毛宗崗批評三国志』（以下、毛宗崗本と称する）である。[1] 毛宗崗本は底本となる『李卓吾先生批評三国志』（以下、李卓吾本と称する）に大きく手を加えており、その特徴は毛宗崗自身によって書かれた「讀三國志法」に記されている。[2] また、様々な角度から版本間の比較研究がされており、毛宗崗本は細部に至るまで緻密な改変が施されていることが指摘されている。[3]

本稿は、曹操に降った人物のうち、李卓吾本と毛宗崗本において異同が見られた張遼、徐晃、龐徳という三名の人物の描写について、毛宗崗がどのような意図で改変を行ったのか、またどのような基準でそれぞれの人物を描写しているのか、毛宗崗本の評にも着目しながら考察し、その特徴を探ることを目的とするものである。[4]

## 二　張遼に関する描写

毛宗崗本では、李卓吾本と登場人物が入れ替わっている場面がまま見受けられるが、本章ではその中でも特徴的な入れ替えが起こっていた張遼について取り上げ、他の場面での張遼の描かれ方とも比較しながら、その意図について考察する。まず、張遼が他の人物に入れ替えられている場面を挙げる。

### （一）第三十一回[5]

曹操が官渡、倉亭において袁紹と戦っている隙をつき、劉備は軍勢を率いて許都を襲撃しようとしたが、引き返してきた曹操軍と穰山の近くで対峙する。初日は遠征で疲弊していた曹操軍が敗北を喫し、その翌日の場面である。

【李卓吾本】

玄德使趙雲搦戰。操兵旬日不出。玄德又使張飛搦戰、操兵亦不出。玄德愈疑。忽報龔都運糧至、被曹軍圍住。玄德急令張飛去救。流星馬又報①**張遼**引軍、抄背後徑取汝南、玄德曰「雲長所料是也。此間滯住吾兵、必使①**張遼**攻取吾家基業矣。可宜速救老小。急遣雲長救之。」兩軍皆去。不半日、速報玄德曰「①**張遼**打破汝南、劉辟棄城而走。雲長亦被圍住。」玄德大驚。又報張飛去救龔都、也被圍住了。玄德要起、猶恐操兵後襲。小卒來報、許褚搦戰。趙雲欲出、玄德曰「不可出敵。存下氣力、今夜棄寨、望穰山而走。」子龍拒住不出。候至天晚、教軍士飽飡、步軍先出、馬軍後隨、寨中虛傳更點。玄德等離寨。約行數里、轉過土山、火把齊明。山頭上大呼曰「休教走了劉備。丞相在此專等。」四面火鼓喧天、山上曹操自呼「劉備

快降。」玄德慌尋走路。趙雲曰「主公勿憂、但跟臣來。」趙雲挺鎗躍馬、殺開走路。玄德掣雙股劔後隨。鏖戰之間、②**張遼**忽至、與趙雲相戰。背後于禁趕到、玄德助戰。肋落中、李典又到。玄德見勢危、落荒便走。聽得背後喊聲漸遠、玄德望深山僻路、單馬逃生。

捱到天明、側首一彪軍撞出。玄德大驚、乃劉辟引敗軍千餘騎、護送玄德老小皆到。劉辟引孫乾、簡雍、糜芳亦至。玄德問之、皆曰「③**張遼**軍至、勢不可當、因此棄城而走。③**遼兵**趕來、幸得雲長背後當住、因此得脫。」

【毛宗崗本】

次日、又使趙雲搦戰。操兵旬日不出。玄德再使張飛搦戰、操兵亦不出。玄德愈疑。忽報龔都運糧至、被曹軍圍住、玄德急令張飛去救。忽又報①**夏侯惇**引軍抄背後徑取汝南、玄德大驚曰「若如此、吾前後受敵、無所歸矣。」急遣雲長救之。兩軍皆去。不一日、飛馬來報、①**夏侯惇**已打破汝南、劉辟棄城而走、雲長現今被圍。玄德大驚。又報張飛去救龔都、也被圍住了。玄德急欲回兵、又恐操兵後襲。忽報寨外許褚搦戰、玄德不敢出戰。候至天明、教軍士飽食、步軍先起、馬軍後隨、寨中虛傳更點。玄德等離寨約行數里、轉過土山、火把齊明、山頭上大呼曰「休教走了劉備。丞相在此專等。」玄德慌尋走路。趙雲曰「主公勿憂、但跟某來。」趙雲挺鎗躍馬、殺開條路、玄德掣雙股劔後隨。正戰間、②**許褚**追至、與趙雲力戰。背後于禁、李典又至。玄德見勢危、落荒而走。聽得背後喊聲漸遠、玄德望深山僻路、單馬逃生。

捱到天明、側首一彪軍衝出、玄德大驚、視之、乃劉辟引敗軍千餘騎、護送玄德家小前來、孫乾、簡雍、糜芳亦至、訴說「③**夏侯惇**軍勢甚銳、因此棄城而走。③**曹兵**趕來、幸得雲長擋住、因此得脫。」

太字で示したところが版本間で人物が入れ替わっている箇所である。この場面では、曹操が陣営に籠っている間に食糧を運搬していた龔都が包囲され、さらには汝南が背後から攻略されたという知らせが劉備のもとに届いてくるが、まず、汝南を落とした人物の名が、傍線部①の通り李卓吾本では張遼、毛宗崗本では夏候惇となっている。次に、秘かに本陣を離れよ

うとしたところを曹操に気づかれ、血路を切り開こうとする劉備や趙雲らに追い討ちをかける人物は、傍線部②で示したように李卓吾本では張遼であるのに対し、毛宗崗本では許褚とする。その後、汝南から逃げ延びてきた劉辟や孫乾らの口から汝南での出来事が語られるが、傍線部③のようにここでもやはり汝南を攻めた人物が両版本で異なっている。

戦争場面における人物の入れ替えは他にも見られるが、多くは物語の構成上不自然な点を改めるためのものである。[6] この場面においても、傍線部②で示した箇所については、汝南を攻めていたはずの張遼（毛宗崗本では夏候惇）よりも、波線部で示したように、劉備たちの陣営に直接戦いを挑んできていた許褚の方が自然だと判断したのであろう。[7] ただし、傍線部①においては、前後の文章を見ても夏候惇が登場する必然性は見受けられない。それでも毛宗崗はここの場面で張遼を夏候惇に入れ替え、さらに整合性を保つために、傍線部③においても徹底して張遼の名を排しており、そこには張遼の人物造型に関わる明確な意図があったのではないかと考えられる。その意図を探るため、次に毛宗崗本における張遼の人物描写について、改変が施されている箇所を確認していく。

（二―A）第十八回

張遼が呂布の命を受け、高順とともに小沛の劉備を攻めている場面である。

【李卓吾本】

張遼在西門攻打。雲長曰「汝儀表非俗、何故陷身于賊之部下。」張遼低頭不言。關公便知此人有忠義之氣、相拒終日、並無惡言、亦不令軍士打城。關公令人探聽東門消息。人報張飛被辱、只要出城廝殺。關公見張遼退去、徑來東門看時、①只見張飛已出城外和張遼廝殺、遼拍馬而去。張飛欲趕、關公急召入城、令士卒堅守東門。飛曰「張遼怕我而走、哥哥如何趕我回來。」關公曰「張遼武藝不在你我之下。是吾夜來美言說之、其人頗有②歸順之心。今日不欲與汝廝殺、故拍馬而走。」飛方悟、再不出戰。

【毛宗崗本】

次日、張遼引兵攻打西門。雲長從城上謂之曰「公儀表非俗、何故失身於賊。」〔壯士惜壯士。〕張遼低頭不語。〔好張遼。〕雲長知此人有忠義之氣、更不以悪言相加、亦不出戰。〔豪傑愛豪傑。〕遼引兵退至東門、張飛便出迎戰。早有人報知關公。關公急來東門看時、①只見張飛方出城、張遼軍已退。〔好張遼。〕飛欲追趕、關公急召入城。飛曰「彼懼而退、何不追之。」關公曰「此人武藝不在你我之下。因我以正言感之、頗有②自悔之心、故不與我等戰耳。」〔好漢識好漢。〕飛乃悟、只令士卒堅守城門、更不出戰。

（二―B）第十九回

曹操によって下邳城が落とされ、呂布、陳宮が処刑された後、張遼が曹操に罵言を浴びせた場面である。

【李卓吾本】

操大怒曰「敗將安敢辱吾。」拔劍在手、親自來殺張遼。遼引頸待誅。

【毛宗崗本】

操大怒曰「敗將安敢辱吾。」拔劍在手、親自來殺張遼。遼③全無懼色、引頸待殺。

張遼について、人物像に関わるような改変が見られたのは、右の二か所のみである。

（二―A）の傍線部①において、李卓吾本では張飛と張遼が直接刃を交える様子が書かれているが、毛宗崗本では、張飛が城を飛び出したときには張遼は既に退いており、戦う姿勢を全く見せていない。また、傍線部②では、関羽の「貴公の風采は並々ならぬものがあるのに、なぜ賊に身をやつしているのか」という呼びかけに対し、李卓吾本では「歸順之心」を見せ、毛宗崗本では「自悔之心」を見せたことになっている。また、この場面において、毛宗崗は評を通して頻りに張遼を評

価していることがわかる。

（二―B）では、自分を今にも殺そうとする曹操に対して、張遼が全く恐れを見せない姿が傍線部③によってさらに際立って描かれている。また、Aの場面と見比べると、李卓吾本の「歸順之心」という表現は、Bの場面とは矛盾しているように思われる。関羽に会った時点で帰順の意思が大いにあったのだとしたら、曹操に罵声を浴びせるようなことはしないはずだからである。恐らく毛宗崗もその矛盾に気が付き、表現を変えたと考えられるが、そこで「自悔之心」という言葉を用いることで、彼の忠義を重んじる姿勢をより強調したのだと言えるだろう。

以上のように、毛宗崗本は張遼を高く評価しており、彼の人物像に対して正のベクトルで改変が行われていることがわかる。さらに、毛宗崗は他の評においても張遼を高く評価する。

（三―A）第五十三回　総評

張遼之守合淝、其眞大將之才乎。赤壁之戰、射黃蓋以救曹操、猶不過戰將之能耳。觀於此回、有大將之才三。既勝而能懼、是其愼也。聞變而不亂、是其定也。乘機以誘敵、是其謀也。宜其爲關公之器重歟。惟大將不懼大將、亦惟大將能知大將。於黃忠見關公之神武、於張遼亦見關公之知人。

（三―B）第六十七回　総評

金雁橋之斷、孔明以此擒張任。小師橋之斷、張遼不能擒孫權、非張遼之拙於人謀、而實孫權之邀有天幸也。君子於檀溪之奔、知成都之景曆有歸。於逍遙津之脫、亦知秣陵之王氣有驗。

（三―A）の評では、孫権との合淝の戦いにおける張遼の活躍を、三つの才能として絶賛し、傍線部で示したように、「関羽がその才能を認めて尊重するのにふさわしい」と述べている。そもそも、張遼は関羽と深く交流しているという点で、敵将の中では特異な存在である。[8]『三国志演義』自体が、『三国志平話』ではただの敵将であった張遼を関羽の友人とする独自

の設定を作り出しており、[9]関羽を「義」絶として物語の中心に置く毛宗崗にとっては尚更、張遼を関羽の「義」に直接関わる人物として、また関羽が認めた人物として描ききる必要があったのではないだろうか。また、（三―B）では、逍遙津において張遼が孫権を逃したことに対して、「張遼の智謀が劣っていたためではなく、実は孫権に天の助けがあったためである」と張遼を擁護するような評を付しており、あくまでも張遼を有能な武将として描こうとする姿勢が窺える。

ここで、改めて（一）に挙げた登場人物の入れ替わりの意図を検討するに、毛宗崗は張遼と劉備軍とをなるべく戦わせないように配慮していたのではないかと考えられる。元々張遼が劉備たちと直接戦う場面は殆どなく、李卓吾本においても（一）に挙げた第三十一回、（二―A）の第十八回、そして第五十回での赤壁の戦いの三回しかない。既に見てきたように、毛宗崗本では（一）では張遼を不在とし、（二―A）では文章を書き換えることで張飛と戦わせないようにしている。また、赤壁の戦いでは、両版本とも「連環の計」にかかって逃げ惑う曹操を護衛する中で、襲い掛かってきた張飛と許褚が戦うのを徐晃と共に援護する描写があるのみで、直接戦ってはいない。[10]毛宗崗は二つの場面を書き換えることで、張遼を蜀とは戦わない武将とし、さらに彼の人物像をよりよく描くことで、（三―A）の総評にあるように関羽との友情を揺るぎないものとしたのである。

ここまで、張遼に関する描写について、版本間の異同を見てきたが、改変の基準となったのは一貫して「関羽との関係」であったと指摘できよう。では、同じように「関羽との関係」が記されている他の武将において、同様の改変は見られるだろうか。

## 三　徐晃に関する描写

本章では、張遼以外に関羽との交流がある魏の武将として、徐晃を取り上げる。徐晃と関羽の交流については、『三国志』にも記載があり、[11]『三国志演義』はそれを踏襲している。また、毛宗崗本は第二十七回において、「曹操配下の武将のうち、張遼以外にただ徐晃だけが関羽と親交がある」[12]と二人の関係に言及しているが、この文章は李卓吾本にはなく、毛宗崗が徐

晃と関羽の関係に対して関心を持っていたのではないかと考えられる。

徐晃の描写における版本間の異同については、張遼に見られたような人物の入れ替えではなく、徐晃の名前が李卓吾本から削除されている場面が一か所見受けられた。

（一）第三十一回

劉備が曹操との穣山の近くでの戦いに敗れ、追撃をかわしながら何とか危機を脱し、改めて陣を布いたあとの場面である。

【李卓吾本】

玄德使雲長尋覓張飛。比及去救襲都、襲都已被夏侯淵所殺。飛與襲都去報讐、殺散夏侯淵。迤邐趕去、被樂進、徐晃攔住。雲長路逢敗軍、尋蹤而去、殺退樂進、徐晃、與飛同回見玄德。

【毛宗崗本】

玄德使雲長尋覓張飛。原來張飛去救襲都、襲都已被夏侯淵所殺。飛奮力殺退夏侯淵、迤邐趕去、却被樂進引軍圍住。雲長路逢敗軍、尋蹤而去、殺退樂進、與飛同回見玄德。

前章で見たように、第三十一回のこの戦いは、張遼を夏候惇や許褚と入れ替えることで、毛宗崗本では登場させていなかったが、傍線部の通り、徐晃においてもまた、毛宗崗本では名前がなく、関羽と戦ったのは楽進一人となっている。前後の文脈からも特に徐晃を除外する必然性はなく、やはり張遼と同じように関羽と直接戦わないように配慮しているのではないかと考えられる。ただし、毛宗崗本で最後まで蜀と直接戦うことのなかった張遼と異なり、徐晃は後に蜀と、さらには関羽と直接戦うことになるが、これについては後述する。

次に、版本間の異同のうち、徐晃の人物像に影響する改変を下記に挙げる。

（二）第十四回

楊奉の部下として活躍する徐晃を曹操は味方につけようとし、彼と旧知の仲である満寵を派遣した場面である。

【李卓吾本】

却說滿寵扮一小卒、雜在隊中、入晃營中軍帳前。晃渾身披甲、于帳下看見寵。寵入長揖曰「故人安樂否。」徐晃見之、久立、乃曰「莫非山陽滿伯寧乎。」晃年小時在山陽爲官、寵爲吏被人奪買物告官、因有識。寵曰「然也。」晃曰「何故到此。」寵曰「曹操在兗州請我作從事、今日偶見故人陣上耀武、吾甚惜之、故不避死而來、直諫于公。據公之勇、世之罕有、何故屈身于楊奉、韓暹之徒乎。曹將軍之英雄、力扶漢室、拯救生靈。今日陣前、不忍以健將與公決死戰、故遣寵來。公何不背暗投明。」①晃喟然歎曰「吾固知奉、暹非立業之人、爭奈從之久矣、不忍相捨。」寵曰「豈不聞『良禽相木而棲、賢臣擇主而事。』大丈夫知而不爲、非丈夫也。」晃起身而謝曰「願聽公言。」寵曰「何不就殺奉、暹而去、以爲進見之功。」晃曰「以臣殺主、大不義也。②吾不爲之。」寵曰「公眞有德之士。」遂引部下數十騎、同滿寵來投曹操。

【毛宗崗本】

是夜滿寵突至其前、揖曰「故人別來無恙乎。」徐晃驚起、熟視之曰「子非山陽滿伯寧耶。何以至此。」寵曰「某現爲曹將軍從事。今日於陣前得見故人、欲進一言、故特冒死而來。」晃乃延之坐、問其來意。寵曰「公之勇略、世所罕有、奈何屈身於楊、韓之徒。曹將軍當世英雄、其好賢禮士、天下所知也。今日陣前見公之勇、十分敬愛、故不忍以健將決死戰、特遣寵來奉邀。公何不棄暗投明、共成大業。」①晃沉吟良久、乃喟然嘆曰「吾固知奉、暹非立業之人、奈從之久矣、不忍相捨。」寵曰「豈不聞『良禽擇木而棲、賢臣擇主而事。』遇可事之主而交臂失之、非丈夫也。」晃起謝曰「願從公言。」寵曰「何不就殺奉、暹而去、以爲進見之禮。」晃曰「以臣弑主、大不義也。②吾決不爲。」③〔與呂布殺丁原大相懸絕。公明眞義士、故後來獨與

雲長公交厚。」寵曰「公眞義士也。」晃遂引帳下數十騎、連夜同滿寵來投曹操。

この場面では、曹操への投降を勧める満寵の言葉に対して、傍線部①のように、李卓吾本では「ふっとため息をついて」としか書かれていないのに対し、毛宗崗本では「長い間考え込んでいたが、ふっとため息をついて」と躊躇う様子を書き加えている。また、傍線部②では、曹操への手土産に楊奉、韓暹を殺してはという満寵の提案に対して、毛宗崗本では「私は決してそんなことはしない」と李卓吾本よりもさらに強い語気で断っている。さらに、波線部③のように毛宗崗は「呂布が丁原を殺したのとは大違いだ。公明はまことの義人であり、だからこそ後に独り雲長と親交を持つのである」と、董卓に降る際に手土産として養父の丁原を殺した呂布と比較し、また関羽との交友関係を引き合いに出して徐晃を評価している。先に毛宗崗は徐晃と関羽との関係に関心を持っていたと述べたが、ここでもやはり二人の関係を意識しており、関羽の友人としてふさわしい人物に描くべく、徐晃の「義」を強調するように改変をしているのである。

しかし、徐晃は関羽の友人でありながら、第七十五回から七十六回にかけて、関羽討伐に自ら名乗り出て、樊城にて関羽を打ち破る。毛宗崗本でもそのプロットは全く改変されていない。ここが張遼との大きな違いであり、毛宗崗も第七十六回の総評で二人を比較し、「両者とも将軍としての才能が大いにあり、故に関公は彼らと親しくしていた。しかし、張遼は関公を苦難の中から救ったのに対し、徐晃は関公を苦難に陥れており、徐晃の人となりは張遼にはるか及ばない。[13]」と徐晃を批判している。さらに、その批判の姿勢は徐晃と関羽の会話場面にも現れている。

（三）第七十六回

樊城にて、関羽が陣営から姿を表し、旧知の仲である徐晃と相対する場面である。[14]

【李卓吾本】

公勒馬問曰「徐公明安在。」魏營門旗颸處、徐晃出馬、背後十員驍將、雁翅擺在兩邊。晃欠身而言曰「自別君侯、倏忽數載、不想君侯鬚髮蒼白。憶昔壯年相從、多蒙教誨、感謝不忘矣。君侯英風震於華夏、①天下之士莫不歎服。今幸得一見、②不勝忻喜也。」公曰「吾與公明交契深厚、非比他人、何故數窘于吾兒耶。」晃聽畢、綽兵器在手、回顧衆將、厲聲大叫曰「若取得關公首級者、重賞千金。」公驚而言曰「公明何出此言耶。」晃曰「③此國家之事、非某之私。」言訖、揮大斧直取關公。公大怒、亦揮刀迎之。戰八十餘合、公雖武藝高強、終是右臂少力。關平火急鳴金、公撥馬回寨。四下裏喊聲大震、乃是樊城曹仁見魏王救兵至、急引軍殺出城來、與徐晃會合、兩下夾攻、荊州兵大亂。關公上馬、引衆將急奔襄江、上流頭呂常引兵殺來、背後魏兵追至、亦有死于水中者。

【毛宗崗本】

公勒馬問曰「徐公明安在。」魏營開旗門處、徐晃出馬、欠身而言曰「自別君侯、倏忽數載不見、君侯鬚髮已蒼白矣。憶昔壯年相從、多蒙教誨、感謝不忘。今君侯英風、震於華夏、①使故人聞之、不勝嘆羨。茲幸得一見、②深慰渴懷。」〔與曹操對韓遂語相似。〕公曰「吾與公明交契深厚、非比他人。今何故數窮吾兒耶。」晃回顧衆將、厲聲大叫曰「若取得雲長首級者、重賞千金。」〔忽然變臉、前恭後倨、又與曹操對韓遂大是不同。〕公驚曰「公明何出此言。」晃曰「③今日乃國家之事、某不敢以私廢公。」〔與關公在華容時、何啻天壤。〕言訖、揮大斧直取關公。公大怒、亦揮刀迎之。戰八十餘合、公雖武藝絶倫、終是右臂少力。關平恐公有失、火急鳴金、公撥馬回寨。忽聞四下裏喊聲大震。原來是樊城曹仁聞曹操救兵至、引軍殺出城來。與徐晃會合、兩下夾攻、荊州兵大亂。關公上馬、引衆將急奔襄江上流頭。背後魏兵追至。

傍線部①において、関羽の英雄ぶりが知れ渡っていることに対して李卓吾本では「天下の士で感嘆し敬服しないものはおりません」と言っているのに対し、毛宗崗本では「古くからの友人として非常に感嘆し憧れております」と、関羽との個人的な関係を自ら強調している。続けて、関羽と再会できたことに対しては、傍線部②のように李卓吾本では「喜びにたえません」としているが、毛宗崗本では「長年ののどの渇きが癒されるようです」とより大げさな表現が用いられている。さら

に、毛宗崗は波線部の評を通して徐晃の言動が馬超と韓遂とを仲違いさせようとした曹操の言動（第五十九回）と似ていることを、二か所にわたって指摘する。[15]「奸」絶である曹操との類似性を示すことで、（二）の場面とは対照的に批判的な評となっているのである。

その後、徐晃は自軍の諸将に向かって関羽の首を取れば千金の褒美を与えると叫び、驚いて理由を尋ねた関羽に対して、傍線部③の通り、李卓吾本では「これは国家の問題で、私事ではないのです」と答えているが、毛宗崗本では「今日のことは国家の問題であり、私は私情によって公事をないがしろにはしません。」と答えている。文意に大きな違いはないが、この台詞は華容道において関羽が曹操に向けて発したもののリフレインとなっており、[16]鮮やかな対比を作り出すことによって、その直後につけられている「関公の華容道での振る舞いとは天地の比ではない」という毛宗崗の批判の効果を増している。

以上のように、徐晃に対する毛宗崗の評価は（二）のような正のベクトルのものから、（三）に挙げたような負のベクトルのものに変化しており、最後まで正のベクトルの評価をしていた張遼とは大きく異なる。張遼も徐晃もはじめは別の主君に仕えていながら、曹操に投降した武将であり、また関羽との親交があるという点でも共通しているが、両者の評価が分かれていくのは、その基準が常に「関羽との関係」にあるからであろう。徐晃がはじめ評価されていたのは関羽との「友好的な」関係性のためであり、その後一転して批判の対象となるのもまた、関羽との「敵対的な」関係性によるものである。そして、張遼をよりよく描くことで、彼の人間性を見抜いた関羽の評価はさらに確かなものとなり、一方、友人から敵へと変貌した徐晃との対比を通して、華容道で見せたような関羽の「義」の側面を強調することにも成功しているのである。

さて、「関羽との関係」という観点では常に高く評価されている張遼だが、曹操に投降したという点では、徐晃とともに評価されてはいない。[17]あくまでも「奸」絶たる曹操の部下であり、『三国志演義』が正統とする蜀漢にとっては敵なのである。それでは、曹操に投降した人物のうち、他に「関羽との関係」という観点から人物像に関わる改変がなされている武将はいるだろうか。

## 四　龐德に関する描写

本編では、曹操への降将のうち、版本間で人物像に異同が見られた龐德を取り上げる。まず、異同が見られた箇所を挙げ、次に毛宗崗による龐德への評と比較することで、その異同について考察を試みる。

（一）第六十七回

漢中に攻めてきた曹操は、張魯のもとにいる龐德の武勇に目を留めており、落とし穴に落ちた龐德を生け捕りにし、降伏を勧める。

【李卓吾本】

曹操下馬、叱退軍士、親釋其縛、令龐德投降。龐德尋思張魯不仁、情願拜降。曹操親扶上馬、共回大寨、故意教城上望見。人報張魯、「龐德與曹操並馬而行。」魯信楊松之言爲實。

【毛宗崗本】

曹操下馬、叱退軍士、親釋其縛、問龐德肯降否。龐德尋思張魯不仁、情願拜降。曹操親扶上馬、共回大寨、故意教城上望見。人報張魯、「德與操并馬而行。」魯益信楊松之言爲實。

傍線部で示したように、李卓吾本には「龐德を投降させようとした」とあるが、毛宗崗本では「龐德に降伏するか否かをたずねた」と龐德の主体性が強まるような表現に変わっている。

（二）第七十四回

樊城の救援に龐徳が名乗り出るも、元々の主君である馬超や、兄の龐柔が蜀にいるため軍中より疑問の声があがり、曹操が先鋒の印を返すように命じたあとの場面である。

【李卓吾本】

龐徳聞之、免冠頓首、流血滿面而告曰「某自漢中投降主上、每感厚恩、恨肝腦塗地、不能補報。何疑于德也。德昔在故鄉時、與兄同居、嫂甚不賢、①嫉妒于德、德乘醉提刀殺之。兄龐柔恨入骨髓、誓不相見、已斷義矣。故主馬超有勇無謀、不能下士、故孤身入川。

【毛宗崗本】

龐德聞之、免冠頓首、流血滿面而告曰「某自漢中投降大王、每感厚恩、雖肝腦塗地不能補報。大王何疑於德也。德昔在故鄉時、與兄同居、嫂甚不賢、①德乘醉殺之。兄恨德入骨髓、誓不相見、恩已斷矣。故主馬超有勇無謀、兵敗地亡、孤身入川、②今與德各事其主、舊義已絕。

この場面では、龐德が既に兄と縁が切れていることを示すために、嫂を殺した過去が説明されているが、殺した動機について、傍線部①にあるように、李卓吾本にあった「私を妬み憎んだので」という文言が毛宗崗本では削除され、「ひどく愚かだった」という理由だけで酔った勢いで殺したことになっており、李卓吾本よりも残酷な印象をもたらしている。また、馬超について、毛宗崗本では傍線部②の部分が書き加えられており、今はそれぞれ別の君主に仕えているのだからと、馬超との決別が強調されている。

龐德に関して、人物像に関わる版本間の異同があったのは右に挙げた二か所のみである。次に、龐德に関する毛宗崗の評を挙げる。

（三）毛宗崗による評

①第六十七回　総評

龐德之背馬超而從曹操、猶不至如楊阜之攻馬超以助曹操也、而君子以爲無異。不惟無異、且有甚焉。凡阜之所以涕泗縱横、必欲破馬超而後快者、不過以韋康之見殺耳。阜爲康之參軍。而爲康報讐至於如此之激。德爲馬騰家將、而乃甘心事一殺馬騰之曹操、是獨何心哉。君子曰「龐德於是乎不及楊阜。」

②第七十二回

刺斜裏閃出一將、大叫「休傷吾主。」〔忘卻舊主、而以操爲吾主、豈不羞殺。〕視之、乃龐德也。

③第七十四回　総評

關公初欲與馬超比試、而今與馬超之部將爭鋒、是與戰馬超無異也。馬超既與關公爲一家、而龐德乃與關公死戰、是亦與戰馬超無異也。以關公敵馬超、猶未爲損重。而以龐德鬬馬超、毋乃爲背主乎。其後既不肯背曹操而降關公、其初何以背馬騰而降曹操。故龐德之死、君子無取焉。

④第七十四回

德喚其妻李氏與其子龐會出、謂其妻曰「吾今爲先鋒、義當效死疆場。我若死、汝好生看養吾兒。吾兒有異相、長大必當與吾報讐也。」〔以死自誓固是好漢、惜其用之不當耳。〕

⑤第七十四回

龐德搦戰十餘日、無人出迎、乃與于禁商議曰「眼見關公箭瘡舉發、不能動止。不若乘此機會、統七軍一擁殺入寨中、可救

樊城之圍。」于禁恐龐德成功、只把魏王戒旨相推、不肯動兵。〔于禁忌龐德、正爲龐德背馬超之報。〕

⑥第七十四回

自平明戰至日中、勇力倍增。關公催四面急攻、矢石如雨。德令軍士用短兵接戰。德回顧成何曰「吾聞『勇將不怯死以苟免、壯士不毀節而求生。』〔此一語在被擒於曹操時何不記之。〕

⑦第七十四回

關公又令押過龐德。德睜眉怒目、立而不跪。〔不肯跪關公、獨肯跪曹操、殊無足取。〕關公曰「汝兄見在漢中、汝故主馬超亦在蜀中爲大將、汝如何不早降。」德大怒曰「吾寧死於刀下、豈降汝耶。」〔德之所以不降者、想以妻子在許昌故耶。嫂可殺、兄可絕、而妻子獨不可棄耶。〕罵不絕口。公大怒、喝令刀斧手推出斬之。德引頸受刑。關公憐而葬之。於是乘水勢未退、復上戰船、引大小將校來攻樊城。

⑧第八十二回総評

孫策不疑太史慈、孫權不疑諸葛瑾、其事同乎。曰「不同。」策當兵勢方盛之時、其信慈爲易。權當國勢可憂之日、其信瑾爲難也。龐德不以兄之在蜀而背魏、諸葛瑾不以弟之在蜀而背吳、其事同乎。曰「不同。」德事馬超而不終、則德之義爲非義。瑾事孫權而無貳、則瑾之忠乃眞忠也。

傍線で示した箇所が毛宗崗による龐德評となっている。おしなべて低い評価となっているが、特に①②⑤⑥⑧は、馬超を裏切ったことに対する批判となっている。張遼や徐晃と異なり、蜀漢に帰順した馬超に背くことは蜀漢への裏切りにもつながるものであり、より批判の対象となりやすいのも自然なことと言えるだろう。なお、曹操に降る以前には龐德に対する批

判は書かれていない。このことから、（一）（二）に挙げた版本間の異同について考察すると、右に挙げたような毛宗崗の評価に呼応する形で改変がなされていることがわかる。特に（一）では毛宗崗本の龐徳はより主体的に、自分の意志で曹操に投降したような印象を受けるが、ここで龐徳の主体性が描かれているからこそ、毛宗崗の批判が的を射たものとなり得るのである。実によく計算された改変だと言えるだろう。

さらに、毛宗崗は馬超だけではなく、③⑦のように関羽に対する龐徳の態度についても厳しい言葉で批判する。蜀将となる馬超を裏切ったこと、曹操に投降したこと、この二点だけでも充分に批判の対象となり得るが、毛宗崗はそこで「関羽との関係」という観点からも龐徳の人間性を糾弾するのである。一方、龐徳と共に関羽と戦った于禁に対しては、その失策を揶揄するような評はあるものの、[18] 龐徳に顕著に見られる人間性に対する批判は行っていない。于禁は関羽に捕らえられた際、龐徳とは対照的に必死に命乞いをしているが、そうした態度の違いもまた毛宗崗の批判が龐徳に集中した一因とも考えられる。[19]

## 五　おわりに

本稿では、張遼、徐晃、龐徳という三名の人物の描写について、『三国志演義』の諸版本のうち、李卓吾本と毛宗崗本における異同を調査し、毛宗崗がどのような意図で改変を行ったのか、またどのような人物造型がなされているか、毛宗崗自身による評とも比較し検討した。

張遼の描写においては、人物の入れ替えという大きな異同が見られたが、その他の異同や、張遼を関羽の友人として高く評価する毛宗崗評から、人物の入れ替えは張遼と劉備軍とが直接干戈を交えないようにするためのものであり、毛宗崗本は張遼をよりよく描くことで、関羽との関係を確固たるものにしていることを指摘できた。一方、同じく曹操の臣下で関羽の友人である徐晃に関しては、関羽と敵対するまでは張遼と同様好意的に描かれてはいるものの、正史に基づいた二人の敵対シーンにおいて、徐晃は曹操寄りの人物として負のベクトルに描かれていた。つまり、「関羽との関係」が、張遼と徐晃の

評価や人物造型に影響していたのである。

最後に、龐徳に関しても版本間の比較を行ったところ、毛宗崗本では明らかに負のベクトルで改変が行われていたが、馬超を裏切り曹操に帰順したという点以外に、ここでも「関羽との関係」が毛宗崗の評価に影響していることを考察できた。本稿で扱った三名はいずれも曹操の臣下であるが、その評価には「関羽との関係」を含めた複数の基準が絡んでいた。[20] 毛宗崗は一人一人の立場に応じて、その人物に該当する基準に則って評価をし、それと符合するように文章の改変を行っていると考えられる。今回の調査では触れられていない人物描写においても、複合的な比較軸や評価基準を意識しながら、今後の研究に取り組んでいきたい。

註

1 「三国志演義』の諸版本については中川諭『『三國志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八年）及び金文京『三国志演義の世界　増補版』（東方書店、二〇一〇年）を参照。

2 特に人物描写については、諸葛亮を「智」絶、関羽を「義」絶、曹操を「奸」絶に位置づけ、その評価に基づいた改変を行っている。「吾以爲『三國』有三奇、可稱三絶。諸葛孔明一絶也、關雲長一絶也、曹操亦一絶也。（中略）有此三奇、乃前後史之所絶無者。故讀遍諸史、而愈不得不喜讀『三國志』也。」（毛宗崗本『三國演義』「讀三國志法」）

3 毛宗崗本の特徴については、仙石知子『毛宗崗批評『三國志演義』の研究』（汲古書院、二〇一七年）に過去の研究とあわせて詳しくまとめられている。なお、仙石氏は毛宗崗本の表現技法について、次の四つの特徴を挙げている。「第一に人物像を一貫させ、第二に「三絶」を物語の中核に据え、第三に細部に至るまでの綿密な表現を行うことで、文学としての完成度の高さを持っていた。さらに、第四に当該時代の社会通念を利用する表現技法を用いることで、千五百年の時空を超えて、三国時代の物語を「現代」の物語として読者に理解させた。」また、ディテールに及ぶ毛宗崗本の改変については、仙石氏の同書の他、拙稿「毛

宗崗本『三国志演義』の特徴――曹操臣下の文官における人物描写の比較の試み――」（『慶應義塾中国文学会報』第三号、二〇一九年三月）でも指摘している。

4 比較する版本について、『李卓吾先生批評三国志』と題するものは複数あるが、その中で最も古い呉観明本を用いる（対訳中国歴史小説選集　李卓吾先生批評三国志』（ゆまに書房、一九八四年））。毛宗崗本は『三國演義』（上海古籍出版社、一九八九年）及び『三国演義　会評本』（北京大学出版社、一九八六年）を参照した。また、比較の際には現存する最古の版本とされる嘉靖本も用いたが、李卓吾本と明確な差が見られなかったため、特に本文に記載はしない。字体は繁体字で統一し、毛宗崗の評については必要箇所のみ〔〕で囲んで示した。

5 それぞれの章回数は全て毛宗崗本に準拠する。

6 例えば、第二十四回で夜襲に失敗し逃げ出した劉備の行く手を阻む人物について、李卓吾本では楽進、毛宗崗本では李典となっているが、この改変の意図は該当箇所に付せられた毛宗崗評から読み取ることができる。（「李典在正北、夏侯惇在東北、夏侯淵在西北。玄德望北而逃、正當與此三路軍相遇、一筆不亂。」）この場面の前に曹操側の武将八人がそれぞれどの方角にいるかが示されており、また劉備の逃げた方角が北であることから、西南からくるはずの楽進ではなく、北にいる李典の方がより自然だと毛宗崗が判断したための改変であろう。

7 劉備たちが陣を布いている「穰山」について、後漢、三国時代にこの地名はない。（沈伯俊・譚良嘯編著『三国演義大辞典』（中華書局、二〇〇七年）参照）『大明一統志』巻六十七「成都府」（三秦出版社、一九九〇年）には「穰山　在簡縣貴平鎮東北四里。有穰水源出此山。」と記載があるが、地理的にこの場面に出てくる「穰山」とは別のものであろう。

8 『三国志演義』における張遼の人物像について、小松建男は「『三国志演義』の作者は、平話や元曲では適役に過ぎなかった張遼を、関羽の友人とし生まれ変わらせた。二人は、友人であり続けることの難しい情況におかれている人物である。それをあえて友人とし、華容道に至るまでの、長い道のりにおける二人の行動を通して、『忠』の人と『義』の人を巧みに造型して見せたところこそ、作者の最大の工夫であり、またそれは充分に成功したと言えるであろう。」と指摘している。（「華容道の関羽と張遼」（『中国文化：研究と教育』第六六巻、二〇〇八年六月））

9 ただし、『三国志』「関羽伝」裴松之注引『傅子』には関羽と張遼の関係性を感じさせる記述がある。「遼欲白太祖、恐太祖殺羽、不白、非事君之道、乃歎曰『公、君父也。羽、兄弟耳。』遂白之。太祖曰『事君不忘其本、天下義士也。度何時能去。』遼曰『羽受公恩、必立效報公而後去也。』」（以降、『三国志』の引用は全て中華書局標点本に拠る）『三国志演義』の作者がこの箇所をも

とに張遼を関羽の友人とする着想を得た可能性については、注8前掲論文でも指摘されている。

10 毛宗崗本「諸軍衆將見了張飛、盡皆膽寒。許褚騎無鞍馬來戰張飛。張遼、徐晃二將、縱馬也來夾攻。」なお、赤壁の戦いにおいて、張遼は呉の黄蓋を弓で射て落水させるが、この場面に関して、李卓吾本との間に大きな違いは見られない。

11 「蜀記曰、『羽與晃宿相愛、遙共語、但說平生、不及軍事。須臾、晃下馬宣令『得關雲長頭、賞金千斤。』羽驚怖、謂晃曰『大兄、是何言邪。』晃曰『此國之事耳。』」（『三国志』「関羽伝」裴松之注引『蜀記』）

12 「却說曹操部下諸將中、自張遼而外、只有徐晃與雲長交厚、其餘亦皆敬服。」

13 「兩人皆有大將才、故關公與之友善。然遼能救公於患難之中、晃獨窮公於患難之際、則晃之爲人殆遜於遼云。」

14 この場面は『三国志』の記載を基にしている。注11参照。

15 第五十九回のこの場面については、李卓吾本と毛宗崗本の間に大きな異同は見られない。

16 毛宗崗本第五十回にて、赤壁の戦いで敗れ、追撃に苦しみながら華容道に辿り着いた曹操に対して、関羽は「今日之事、豈敢以私廢公。」と発言している。なお、李卓吾本では「今日奉命，豈敢爲私乎。」となっており、徐晃の台詞との関連性は見受けられない。

17 第二十九回、許貢の三人の食客が孫策に対して許貢の仇討ちを計画するも、失敗しその場で殺された場面において、毛宗崗は「義哉三客、勝徐晃、張遼輩多矣。」と評している。また、第二十六回の総評では、曹操のもとに多くの英雄が投降していく中で、関羽だけが靡かなかったことを、曹操に降った人物と比較して称賛している。（「曹操所以駕馭人才、籠絡英俊者、恃此數者已耳。是以張遼舊事呂布、徐晃舊事楊奉、賈詡舊事張繡、文聘舊事劉表、張郃乃袁紹之舊臣、龐德乃馬超之舊將、無不棄故從新、樂爲之死。獨至關公、而心戀故主、堅如鐵石。金銀美女之賜、不足以移之。偏將軍、漢壽亭侯之封、不足以動之。分庭抗禮、杯酒交歡之異數、不足以奪之、夫而後奸雄之術窮矣。奸雄之術既窮、始駭天壤間不受駕馭、不受籠絡者、乃有如此之一人、即欲不吁嗟景仰、安可得乎。」）

18 例えば、第七十九回、部下の成何の注意を聞かずに洪水によって大敗する場面で、毛宗崗は「于禁素來知兵、今何愚昧之甚。總之人不可以有私、私則蔽明、可不戒哉。」の評を付している。

19 「関羽との関係」次第で負のベクトルに人物像が改変されることについて、『三国志演義』成立過程における変遷についてはしばしば言及されている。例えば関羽を死に追いやった呂蒙などがその代表例で、『三国志』では病死とされているが、『三国志演義』では関羽の霊にとりつかれ、全身の穴から血を吹き出して死ぬことになっている。呉の人物には他にも周瑜や魯粛など、孔

明や関羽と関わったことで正史よりも評価の低い人物に描かれている例が挙げられるが、陸遜についてはそのような現象は全く起きていない。吉永壮介氏はその理由について「陸遜が撃破したのが劉備であり、諸葛亮や関羽ではなかったことに尽きるであろう。」と指摘している。（吉永壮介「『三国志演義』の「笑い」の位相について」『藝文研究』第一〇四号、二〇一三年六月）版本間においても、同じ観点から比較できる可能性がある。

20 注3前掲の拙稿においては、「漢王朝への忠誠心」を軸として曹操臣下の文官における人物描写の比較を行った。